

大学新入生へのピア・サポート訓練による効果の検討

山崎理央

(福山大学 人間文化学部)

大学生同士の支え合いの関係構築を促し、彼らの大学生活への適応の一助となることを目的として、新入生を対象にピア・サポートの訓練プログラムを導入している。本研究では、支え合いのスキルの訓練が援助を求める立場にもたらす効果に着目し、プログラムの実施を経て、対象学生の自尊感情、現代青年に特徴的とされる友人関係のあり方、および友人に対する援助要請意識にどのような変化が見られるのか、プログラムの実施前後に行った質問紙調査の結果を比較し検討した。

方法

対象者 ある地方大学における心理学科の1年生53名(女性32名, 男性21名)に、学年前期の第1週より毎週1コマで、自己理解・双方向のやりとり・傾聴・価値観の違い・悩みの相談などのテーマに関するワークで構成する全10回の訓練プログラムを実施した。参加者は4グループに分かれ、それぞれ学科教員とともに複数名の上級生がインストラクターを担当した。

手続き プログラム実施期間の開始前および終了後に質問紙調査を集団で実施した。調査への参加は任意とし、回答は無記名で求めた。質問紙は以下の内容で構成した。Rosenberg 自尊感情尺度(RSES)のMimura & Giffiths(2007)による日本語版(10項目, 4件法): 自尊感情を測定する尺度。岡田(1995)の友人関係尺度(17項目, 4件法): 青年期の友人関係の特徴について測定する尺度。芥川・兒玉(2009)の援助要請意識尺度(21項目, 5件法): 非専門家である友人に対しての援助要請意識を測定する尺度。

結果および考察

尺度ごとに各回答者の合計得点を算出し、それぞれ調査時期(プログラムの実施前・実施後)×性別の2要因分散分析を行った。

自尊感情では、調査時期の主効果が有意であり($F(1,97)=5.04, p<.05$)、性別の主効果が有意であった($F(1,97)=6.60, p<.05$)。プログラムの実施を経て自尊感情は向上しており、また実施期間を通

して男性のほうが高かった。

友人関係については「気遣い」「ふれあい回避」「群れ」の3下位尺度の合計得点において、調査時期の主効果に有意な傾向が見られ($F(1,97)=3.43, p<.10$)、性別の主効果が有意であった($F(1,97)=5.90, p<.05$)。いわゆる希薄で表面的な友人関係よりも、深い親密な結びつきを求める友人関係を男性はより志向していることが考えられるが、それはプログラムの実施を経て、全体的にもその方向に変化した傾向が見られた。

援助要請意識については「肯定的態度」「相談への不安」「自己評価の低下」の3下位尺度の合計得点(肯定的態度以外は逆転項目)において、調査時期の主効果に有意な傾向が見られ($F(1,97)=2.77, p<.10$)、性別の主効果が有意であった($F(1,97)=12.63, p<.001$)。援助要請意識はプログラムを経て低下した傾向が見られた一方、調査時期を通して女性のほうが援助要請意識が高かった。

表1 プログラム実施前後における各尺度の平均値(SD)

		実施前(n=51)		実施後(n=50)	
		平均値	SD	平均値	SD
自尊感情	女性	21.96	3.75	24.45	2.46
	男性	24.67	4.04	25.19	2.58
友人関係	女性	47.82	4.96	46.38	4.30
	男性	45.83	3.68	43.76	5.50
援助要請意識	女性	75.85	8.97	74.21	9.68
	男性	70.50	10.24	65.62	9.44

自己理解を促す訓練内容が自尊感情の向上に効果をもった可能性が考えられる一方で、プログラム実施を経ての友人関係と援助要請意識の変化については明確ではなかった。また今回の対象者の特徴として、男性は自尊感情が女性よりも高く、女性は友人関係において気遣いをしている一方、援助を求めることにはより肯定的で不安が少なかった。プログラムは新入生同士の支え合いの関係構築を働きかけることを意図したものであったが、実施直後も大学生活の導入期ととらえると、これらの側面がその後の大学生活の中でどのように変化していくのかも検討していきたい。